

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

法・政治・社会

Law, Political Science and Sociology

2019 年 3 月

March 2019

桜美林大学 法学・政治学系

J. F. Oberlin University Division of Law and Political Science

藤田省三さんの思い出—— 冷戦終結のころ

Memories of FUJITA Shozo

太田 哲男

OTA, Tetsuo

(一) はじまり

「太田君、いっしょに勉強会をやらないか」

思想史家の藤田省三さん(1927～2003)からこう声をかけられたのは、1990年9月14日のこと。その日は、古在由重さん(1901～1990)の追悼集会在千代田区の九段会館で開催された日だった。(古在先生、藤田先生ほか、以下に出てくる私と接点のあった先生方には先生と記すべきだという思いもあるが、学校制度のなかでお世話になった人はいないので、基本的に「さん」付けで書くことにする。)

九段会館(戦前は「軍人会館」)は、東日本大震災(2011)で被災し、それ以降は営業を停止しているが、それはともかく、当日はこの会館に1200名ほどが集まって、追悼集会被開かれた。翌15日付「朝日新聞」(東京版)には、この集会のことが短く報道されている。

藤田さんから勉強会の誘いを受けることなどまったく予期していなかった私は、とっさに、「どういうテーマの勉強会ですか」とたずねた。

「そりゃ、簡単よ。〈現代とは何か〉ってことだ」

「そうですか。では、お願いします」

やがてその「勉強会」は始まり、93年2月まで2年余り続いた。

私にとって、その2年余りはじつに濃密な日々であった。そして、藤田さんの影響を強く受けるようになった。その2年余りののちにも、時折、電話でのやりとりはあった。

藤田さんから聞いたことをまとめておきたいと思い、あるいは、藤田さんの著作について、つまり藤田省三論を書こうと思って取りかかったことも一再ではなかったものの、まとまらないまま今に至った。その勉強会のころから、なんと25年以上もの時が流れてしまった。しかし、当時聞いたことの一部であれ書き残しておきたい、書き残しておくべきだという気持ちは依然としてもっている。

私がここに書こうとしているのは、「論文」ではなく、回想文にすぎず、論文の掲載を旨とする本学の紀要にこれを掲載していただくのは場違いではあろう。私は2019年3月に大学を退職する予定である。退職を控えた者の「特権」として、この場違いな回想文を書かせていただくことにした。

古在さんと藤田さん

『藤田省三著作集8 戦後精神の経験II』(みすず書房、1998年。以下、著作集と略称)には、「デモクラットの精神」という文章があるが、これは、古在さんの告別式での弔辞である。

この弔辞の後ろに、「古在由重先生追悼集会のよびかけ」という一文が「附」として収録されている。よびかけ人として名前を連ねているのは、家永三郎・加藤周一・久野収・徐京植・田中里子・遠山茂樹・緑川亨など11氏であり、藤田さんの名前はここには出ていない。しかし、じっさいにこの一文を草したのは藤田さんだった。90年3月の古在さん没後まもなく、追悼集会被しようという話がいくつかのグループや個人から出て、話がまとまり、

実行委員会が進行していたのだった。

また、同書所収「其の心の在り方の延長線を——古在由重追悼集会にて——」は、追悼集会の最後に登壇した藤田さんのスピーチである。

このふたつの追悼の辞などからうかがえるように、古在・藤田おふたりには30年に及ぶ親交があり、藤田さんは、追悼集会の準備に打ちこんだ。私は、古在宅での勉強会に出席していた関係で、追悼集会の実行委員になった。その実行委員会の事務局長格が、出版社(D社)を経営していたKさん(2015年逝去)だった。

藤田省三の名前はむろん知っていたけれども、直接に話をするようになったのは、この追悼集会の準備過程からだった。

古在由重追悼集ほか

藤田さんと私の接点は、この勉強会以外でも三つのことで生じた。

まずは古在由重追悼集編集の仕事、次いで藤田さんの対談「マルクス主義のバランスシート」(『思想の科学』1991年7月号。のち、著作集6の『全体主義の時代経験』1997年、所収)の校正の仕事、最後に、ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』の翻訳に関連してである。

都内で高校の教員をしていた私は、1990年4月に新設された一私立大学に転じていた。新設大学ゆえ、当初は1年生しか学生がいないので、授業負担は少なかった。それゆえ、追悼集会の事務局の仕事にかなりの時間を費やすことができた。Kさんとは密接に連絡を取るようになり、彼の出版社にも頻繁に出かけるようになった。

それにしても、思想史家として著名な藤田さんが、なぜ私ごときに読書会をしようと声をかけてくださったのか。偶然の僥倖というしかない。

古在追悼集会はその準備過程も含めて、じつに興味深いものだったけれども、この集会自体については、もはや立ち入らなくてよいだろう。

藤田さんは、古在追悼集会に深く関わったが、その意を汲みながら精力的に動いたKさんの政治的立場がなかなか困難な状況にあるのを見て、集会在成功裏に終わったところで、「K君への〈緊急輸血〉(Kさんの言葉)として、勉強会をしてやろう」と考えたらしい。勉強会なら、もう少しメンバーがいてもよい、じゃあ、K君と歩調をあわせて追悼集会の準備をした太田君もついでに入れてやろう、ということになったようである。そこで、冒頭に書いたような、藤田さんからの直接のお誘いになったという次第である。

私が藤田さんと親しく話ができるようになったのは、先にふれた古在由重追悼集の編集作業にも関連している。その編集の仕事は、追悼集会開催とほぼ並行して進行しはじめたと思うが、当時の私には時間的ゆとりがあったから、この編集の実務作業にかなりの時間をさき、その過程で、しばしば藤田さんにうかがいを立てた。たとえば、原稿がほぼ集まって、私が目次案を出したところ、

「この本の冒頭に置く文章をどうするのか」

という「問題提起」というか、「助言」をもらった。私はあちこち探し、吉野源三郎氏(1899

～1981) が古在さんのことをスケッチした「大丈夫の風格もつ哲学者」という新聞記事、そして、古在さんが『河上肇全集』パンフレットに書いた全集推薦の辞「堅牢な知性、不拔の勇氣」というふたつの短文をみつけ、「これでいかがですか」と、藤田さんにみてもらった。すると、その場でこれらを読んだ藤田さんは、

「いいだろう」

とだけ言った。そこでこれらが、序文のごとく冒頭に並んだ。

この追悼集は、『古在由重 人・行動・思想 二十世紀日本の抵抗者』(1991年7月)として刊行された。

追悼集編集作業の合間に、藤田さんは、新設の大学に移った私に聞いた。

「太田君は、どういう科目を担当しているのかね」

「日本文化史です」

と答えると、では、こういう本を読みなさい、という調子で、文学関係のいろいろな本、小説などを紹介してくれたし、そのいくつかは読書会のテキストにもなった。だが、そのことは別稿(『桜美林世界文学』2019年3月、掲載予定)に書いたので、ここではふれない。

追悼集の作業とちょうど時を同じくして、藤田・塩沢対談の校正の仕事があった。この仕事は、当時の時代状況とも関連している。

時代状況と『思想の科学』対談

藤田さんとの交流が進んだ時期は、湾岸戦争の時期でもあった。イラクの指導者だったサダム・フセインがクウェート侵攻・占領を行ない、これに対し、アメリカを中心とする多国籍軍が組織されて、1991年1月にイラクへの空爆を遂行した。

この湾岸戦争が起こったとき、藤田さんは、中東問題に関する本を勉強会のテキストに選んだ。手はじめがサイドの『イスラム報道』(みすず書房、1986年)で、続いてイブラーヒム・スース『ユダヤ人の友への手紙』(岩波書店、1989年)だった。それと並行して、私は「これを読みなさい」という調子で、アイケルマン『中東——人類学的考察』(同、1988年)と中岡三益『アラブ近現代史』(同、1991年)をすすめられた。読書会の別のメンバーは、ルイズ・フィッシャー『石油帝国主義』(新泉社、1974年)を読むといい、とその本を貸与された。

また、デイヴィッド・グロスマンの*The Yellow Wind* (1988) はいい本だから、訳してみたらどうかね、と藤田さんから言われた。その本を少し見たののだが、ほどなくこの本は、千本健一郎氏の翻訳『ヨルダン川西岸』として出版された。

湾岸戦争に関連して読んだ本は、私には一過性のものにとどまった。(今これを書きながら藤田さんの推薦した本が、当時としては新しい本が多かったことに思い至った。)

先に時代状況と書いたが、その〈時代〉とは、何よりも1989年秋の「ベルリンの壁」崩壊に象徴される冷戦の終結ということであり、それはソ連や東欧の社会主義政治体制の崩壊に連なり、マルクス主義の退潮もともなっていた。こちらは一過性とはとうていいえな

かった。

そういう時期に、『思想の科学』は、そのリーダーだった鶴見俊輔氏（1922～2015）の了解に基づくものであろうが、「マルクス主義のバランスシート」という対談を企画し、その対談を藤田さんにもちかけたのだった。藤田さんは、この表題は適切でない^{ママ}と抵抗したというが、結局は、『思想の科学』側の意向というか、「年長の友人」である鶴見氏の意向にしたがうこととなった。

その対談の校正刷りが届いたとき、Kさんと私は、藤田さんからこの校正をしてほしいと言われた。この対談を取録した著作集6の「註」には、「この対談に於る藤田だけの発言量は六時間を超えていた」ので、ある程度の「削除」は無理からぬことだったとある。そういう「削除」の提案をするようにという指示もなされたと思うが、藤田さんの意図は、校正それ自体にあったというより、校正作業を通じて、対談での藤田発言をよく読んでほしい、勉強してほしいというところにあったらしい。

校正の仕事の依頼のときだったか校正を終えたときだったか、藤田さんはKさんと私のために、中野駅近くに一席設けてくれた。

じっさい、私はその校正刷りを読みながら、藤田さんの発言部分に圧倒され、おおいに学んだという気持ちになった。

読書会

古在さんの追悼集と、『思想の科学』対談に関することでは、藤田さん、Kさんと私という三人で話をすることが多かったが、「読書会」あるいは「勉強会」は、読むテキストを決めて行われ、90年末から始まった。追悼集の仕事が終わったあとの91年秋からは、月に1度くらいの割合で勉強会があり、そのメンバーには少し入れ替わりがあったけれど、92年には藤田さん、Kさん、私を含め、6人のメンバーにほぼ固定した。

そして、この勉強会が93年のはじめまで続いて、区切りとなった。それは、藤田さんが法政大学を65歳で定年退職する直前の時期だった。まもなく、藤田さんに直腸ガンがみつかり、手術、そして闘病生活に入った。

今ふり返ればまことに遺憾なことだが、当初の1年間は、藤田さんに会った日時^{ママ}のメモやすすめられた書名のメモ以外、聞いた話の内容を、私はほとんどメモしていない。というのは、藤田さんから話を聞いた翌日からは、すすめられた本を探し出して読むことに熱中したからだった。91年秋以降は簡略なメモを残したこともあるけれども、藤田さんのいろいろな発言を、過不足なく復元することは、今となっては容易ではない。しかし、いくつかのメモは残っているので、それらを参照し、すすめられた本の内容を想起しつつ、回想を書いておきたい。

(二) 冷戦の終焉とソ連・東欧社会主義体制の崩壊

『スターリン時代』と『絶滅された世代』

藤田さんがこの勉強会の基本としたことはやはり〈現代〉を考えるとということであったと、顧みて改めて思う。

Kさんへの「緊急輸血」と先に書いたが、事情は私にとってもあまり違いがなかった。それはまず社会主義とは何だったか、という問題でもあった。当時は、ちょうどソ連・東欧社会主義体制の崩壊期にも当たっていた。

私がまず衝撃を受けたのは、クリヴィツキーの『スターリン時代』(みすず書房、第二版、1987年)とポレツキーの『絶滅された世代』(みすず書房、1989年)であった。これらの本は、コミンテルンに入っていた人々が、スターリンによって少なからず「絶滅」させられた事態を記録していた。

私がこれらの本を読んだ時期からすでに25年を経過している。今になってそれらについて書くことにどういう意味があるのか、疑問がないわけではない。(じっさい、『スターリン時代』も『絶滅された世代』も、翻訳出版の時期はタイムリーだったにしても、今は「品切れ」状態になっている。)しかし、冷戦終結とソ連崩壊という時点で、「戦後精神」の担い手だった藤田さんがどういうことを考えていたのか、その一端の記録という意味はあろうかと考え、当時の藤田さんの発言の一部を復元しておきたい。

この2冊の本には、「絶滅」を推進した者たちのことも描かれていた。たとえば、チェカ、のちにはゲベウとか、いろいろ名称が変わるが、その最初のソヴェト秘密警察議長だったジェルジンスキーのことなど。

「君たちは」、とKさんと私に、「ジェルジンスキーの銅像を知っているかね」と聞く。藤田さんが、「君たちは〇〇を知っているかね」と聞くときは、「君たちは知らないだろうが」という前提があったのだが、じっさい私のばあい、ほとんど藤田さんの推測通りであり、このときもそうだったし、私はそもそもジェルジンスキーという名前自体を『絶滅された世代』ではじめて知った。

ジェルジンスキーは、革命には「汚れ役」が必要だと認識していて、自らそれを引き受けたのだ。そして、ソ連時代には、各地にジェルジンスキーの銅像が建てられた。ソ連崩壊とともに、レーニンの銅像が引き倒されたが、ジェルジンスキーの銅像も同様だ、と藤田さんは解説した。

それからほぼ10年後、『グッバイ、レーニン!』(2003年)という映画を見たとき、レーニンの巨大な銅像が川船で運搬されるシーンが冒頭に出てきて、これは引き倒された像だとわかり、藤田さんの話を思い出した。

ソ連の解体という現代史的事件のなかで生じて来た銅像の引き倒しは、今ではほとんど忘れ去られているかもしれない。しかし、ソ連各地のさまざまな銅像の引き倒しは、それを実行した人びとの関心、意識のありようを如実に物語るものであった。

この『絶滅された世代』の日本語訳には、F・W・D・ディーキンの「英語版への序文」が付けられている。そこでは、「レーニンとロシア・ボルシェヴィキ党に支配された世界革命の将来を深く信じた一九一七年のヨーロッパ青年世代」が、ことに、中部ヨーロッパで生まれた6人の若者たちが、やがてスターリンによって「絶滅」させられることを描いたこの本の意義が説明されている。

この2冊について思い出深いのは、まず、藤田さんの「再現能力」とでもいうべきもので、これらの本に描かれたジェルジンスキーのことを、その情景が浮かんでくるように再現して語り、そのみごとに呆然とした。

未来社の編集者として、藤田さんの『天皇制国家の支配原理』編集を担当した松本昌次さんにこういう話をしたら、松本さんは次のようなことを話してくれた。

いつだったか、藤田さんから、原稿の一部を直したいと言われたが、それがひとつ読点を入れたいということだった。ご自分の打った読点の位置まで記憶しているのかと松本さんは驚いたというのである。私もさもありなんといい、松本さんと、「すごいですねえ」とことばをかわした記憶がある

再現能力とは別のことだが、ディーキンについて（であろう）発言も印象に残る。

藤田さんは、リヒャルト・ゾルゲについて関心を持ち、ゾルゲについて書いてみようと考えたことがあるという。しかし、ゾルゲについては、話は日本国内だけでは終わらない。世界的な広がりの中かで考えなければならないのだが、あるとき、そういうことを調べて書いた本が出て、ゾルゲについて書くのは止めた、ということだった。その書名を聞いたかどうかは記憶にないが、おそらくディーキン他の『ゾルゲ追跡』（筑摩叢書、1980年）だと思う。ディーキン（1913～2005）は、オクスフォード大学のセント・アンソニー・カレッジに属していた歴史家である。

つまり、「張り合う」相手がいわば世界的だった。たとえば、著作集5『精神史的考察』に付された「著作集版へのまえがき」に、この『精神史的考察』、とりわけその冒頭近くに置かれた「或る喪失の経験——隠れん坊の精神史——」が「偉大な古典学者ジェイン・ハリソンに些か張り合った形で」書かれたことを告白している。

また、藤田さんのレーニン論、すなわち、「『プロレタリア民主主義』の原型——レーニンの思想構造——」（1964年。のち、著作集3『現代史断章』所収）について、「ぼくのレーニン論に匹敵するのは、ルカーチのレーニン論だけだよ」と語っていた。

「禁書目録」

クリヴィツキーの『スターリン時代』もポレツキーの『絶滅された世代』も、藤田さんがすすめてくれなかったらたぶん存在自体も知らなかったと思う。そのあたりのことを、藤田さんは次のように言った。

〈敵〉の作品も読まなければならない。レーニンの『帝国主義論』だけ読んで、ホブソンやヒルファージングやローザを読まないのはおかしい。日本のマルクス主義者も

昔はホブソンなどを読んでいた。君たちは、レーニンの『唯物論と経験批判論』は読んでも、レーニンがそこで批判したマッハは読まない。だが、マッハの『感覚の分析』などは面白い。たとえば、感覚的自己認識は鏡を媒介としなければ不可能だとして、鏡を媒介としないで、自我像がどれだけ描けるかと、その像を描いているところなど。もっとも今マッハの著作を読んでいる暇はなかろうが。

マルクスだって、まさしく〈敵〉である資本の構造と論理を、いかなる資本家も及ばない形で描き出したわけだ。

レーニンの『唯物論と経験批判論』には政治的背景がある。経験批判論は懐疑論につながり、それは熱狂を必要とするイデオロギー的政治活動にとって有害だという判断がレーニンには働いたと思われる。つまり、懐疑論はダメだ、ということだ。

ここに述べられたことは、その後、著作集3にある『「プロレタリア民主主義の原型」への補註』に、より立ち入った形で説明されている。

今にして思えばおかしな話だが、私はたしかに、レーニンの『帝国主義論』はくり返し読んだけれども、ホブソンもヒルファーディングも、ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論である『資本蓄積論』も、それまで読んだことはなかった。読んだことがないという表現は、正確ではない。少なくとも私のばあい、これらの著作はレーニンの『帝国主義論』によって「克服」されたのだから読む必要がないと考えていた、というのが正直なところである。

もっとも、『唯物論と経験批判論』については、私には面白いとはさっぱり思えず、途中で投げ出していたが、さりとて、マッハを読もうとも思わなかった。「正統派」の信仰者が「異端者」を見る精神状況でマッハの著作を考えていたといえよかろうか。

つまり、マルクス主義を正しいと認めたことが、他から強制されたわけではないにもかかわらず、自分のなかで「禁書目録」を作ることにつながっていたのである。マッハの本は、自ら作り上げた「禁書」の一つであった。

自らを「正統」と考え、勝手に「禁書目録」を作ってしまうというのは、普通に考えれば尋常ではないだろう。「独断」にすぎない。そのドグマ的な意識を、藤田さんがすすめてくれた本が打ち砕いたといえる。

別の例として、ジョージ・オーウェルのばあいを挙げよう。私はむろんオーウェルの『動物農場』や『一九八四年』は読んでいた。しかし、その『カタロニア讃歌』は、私にとって「禁書」の一つだった。しかし、古在追悼集会を準備する過程や集会の前後に見聞した「コミュニスト」たちへの反発と、藤田さんのすすめがあり、私は『カタロニア讃歌』を読み、圧倒された。藤田さんは、ここに描かれているスペインの状況が、事実に近いのだと言われた。そのことと、クリヴィツキーの著作の記述が符合して、私に迫ってきた。

それと前後して、ドイツチャーの『スターリン』も読んだ。これはじつに面白かった。しかし、考えてみれば、ドイツチャーは、隠れもなき「トロツキスト」であった。

『全体主義の起原』との出会い

クリヴィツキーやポレツキーの本の衝撃に追い討ちをかけるようにしてすすめられて読み、読書会のテキストにもなった作品が、クロスマン編『神は躓^つずく』だった。これは、1920年代から40年代に、共産党に入党したり「同伴者」となったりした人びと、コミンテルンで働くためモスクワに行ったというような経歴の持ち主など（たとえばアンドレ・ジイド、アーサー・ケストラー、スティーブン・スペンダー、リチャード・ライトなど）が離脱していく過程をそれぞれに記録した文章を集めた本である。

藤田さんがこの本を読んだのは、彼の共産党時代だったという。藤田さんは、東大の「ポポロ事件」（1952年）をきっかけに共産党に入党したというが、その際、ポポロ事件に決着がつけば離党するつもりで入党したとのこと。「ぼくはいつ辞めるかを計算した上で入党したんだが、こういうように考えて入党する人は少ないようだな」と言われた。

藤田さんは、入党後まもなく『神は躓^つずく』を読んだが、当時の東大の共産党組織のなかで、この本の内容を周囲に語ることはただならぬ結果を招来すると認識して、「この本を読んだことは、絶対に周りにはしゃべらないように決めたとし、この本を読んだという人に出会ったこともなかった」とのことであった。藤田さんの持っている『神は躓^つずく』（訳書、1950年。のち、ペリかん社、1969年）を見せてもらったが、至るところに大きく丸が書かれるなど、読んだ痕跡の生々しい本だった。

同じころにすすめられたミラン・クンデラのいくつかの作品、特に『冗談』や、ルイバコフ『アルバート街の子供たち』などの小説も読み、「全体主義」のありようを深々と知らされた。同じ文脈で、出版されて間もない高杉一郎さん（1908～2008）の『スターリン体験』（岩波書店、1990年）をすすめられて読んだ。しばらくのちに藤田さんに会うと、「太田君、高杉さんの『スターリン体験』、読んだ？」と聞かれ、「はい、読みました」と答えると、

あの本で、高杉さんは宮本百合子のことを中條百合子と書いているばあいが多いだろう。あれには含みがあるんだよ。

と、面白そうに語っていたことが印象に残るが、その意味についての説明は省略する。

シベリア体験の記録・考察という意味では、高杉さんのこととともに、石原吉郎（1915～77）のことがしばしば話題になり、その『望郷と海』は、勉強会のテキストの一つとなった。

私にとって何より決定的だったのは、ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』だった。ことにその第三部「全体主義」は、「世界観」としての Kommunismus への親近感とはいかなるものかを説明し、その親近感の「精神構造」を白日の下にさらけ出す記述があふれていた。

『全体主義の起原』を読んだことを藤田さんに話すと、「アドルノたちの『啓蒙の弁証法』の記述と比べて、どうかね」と聞かれたので、アーレントの方が明晰だと思いますが、と答えると、「そうだろう」と、うなずいた。

さらに、マルガレーテ・ブーバー＝ノイマンの『カフカの恋人ミレナ』（平凡社、1976年）も衝撃だった。これは、ソ連の強制収容所とナチスの強制収容所の両方に放り込まれた人

のことを書いた本であり、『全体主義の起原』の記述の具体的例証に他ならないと思えた。これも勉強会のテキストにもなったヤノーホの『カフカとの対話』で読んだカフカの像の迫真性も『カフカの恋人ミレナ』の迫真性の確認につながり、私のなかで『全体主義の起原』と共振作用を起こした。

こうした読書すなわち「緊急輸血」を通じて、「マルクス主義」に対する私の考えが変化した。「独断のまどろみ」から揺り動かされ、マルクスは、特別の思想家ではなく、思想家の一人にすぎないという当たり前のことを強く感じるようになった。

ただ、それは、藤田さんのばあい、反マルクスということではなかった。たとえば、資本主義がどのように成立したかという叙述をしているマルクスの『共産党宣言』の前半は素晴らしい、しかし、運動の「綱領」的部分である後半はダメだ、と語っていたが、そういう評価の仕方を私も学んだ。

同じころにすすめられた本として、哲学者のB・ラッセルの著作『ドイツ社会主義』（原書＝1896年、翻訳＝みすず書房、1990年）と『ロシア共産主義』（原書＝1920年、翻訳＝みすず書房、1990年）があった。後者は、1920年、つまり、ロシア10月革命から2年半後、イギリス労働党代表団とともにロシアを訪問したラッセルが、レーニンやトロツキーと会い、都市や農村でびとと対話をかわし、それをもとに書いた本で、なかなか的確な予言に満ちた本だった。こういう冷静な目があったのかと、驚嘆した。

中国の観察という点では、オーウェン・ラティモア『中国と私』（磯野富士子編・訳、みすず書房、1992年）もすすめられて、読んだ。「磯野富士子さんの訳はいいですよ。この本をぜひ読んでください」と藤田さんは言っていた。

また、「アウシュヴィッツのあとに」ということを強く意識した批評家に、G・スタイナーがいたが、彼の『言語と沈黙』（せりか書房、上＝1969年、下＝1970年）もすすめられた。この評論集には「マルクス主義と文学」とひとくくりにされた評論群があった。非マルクス主義の立場からの鮮やかな評論が並び、じつに刺激的だった。

『資本蓄積論』の翻訳

少し後のことになるが、私は藤田さんのすすめもあって『資本蓄積論』を第三部だけながら訳すことにした。第三部だけとしたのは、ここがいわば歴史篇であって、もっとも面白いと私には思われたからである。それに、全体の翻訳は、経済学の専攻でもない私には無理だと思った。異例の形だが、訳すのは第三部だけにしたいと藤田さんに伝えると、「いいだろう」という話になった。戦前に岩波文庫で出た長谷部文雄訳があったから、それを参考にしながら訳した。長谷部訳に明らかに誤訳と思われるところがあり、そのことを藤田さんに話すと、そのことは面白いからぜひ書いておくようにと言われた。

訳文ができあがったころであったと思うが、藤田さんと電話で話した。『資本蓄積論』の翻訳の「解説」をどう書くか、という話だった。ハンナ・アーレントは、ローザの『資本蓄積論』がもっともすぐれた帝国主義論だと考えていたと語り、そして、次のように書きはじめる

のがよいという、指示ともいべきことをいただいた。

資本主義（市場経済）は、一定期間ごとにマルクスの言う本源的〔原始的〕蓄積を繰り返さなければならず、そのために資本主義経済の外に非資本主義的な経済や「自然経済」を必要とするシステムである。ローザ・ルクセンブルクはこのように考えたがゆえに、彼女の主著のタイトルを『資本蓄積論』としたのである。

こういう文言を、「解説」の冒頭に入れるとよい。「そうすると、迫力が出る」というのであった。具体的な「指示」はそれだけだったが、私は電話で聞いたその文言をメモし、訳書冒頭の「訳者まえがき」に書き込んだ。そして、1997年に出版に至った。

本ができあがってD社に納入されたとき、私は藤田さんに電話した。すると藤田さんから、「よくやった」とお褒めのことばをいただいた。そして、「これから、ぼくの家に来なさい。ただし、今、体調がよくないので、家の近くに来たら、もう一度確認の電話をください」と言われた。むろん、喜んですぐに出かけた。しかし、お宅の最寄り駅に着いて電話すると、「やはり体調が悪いので、会えない」と言われた。予想していたことではあったが、残念であった。

この『資本蓄積論』は、まずまずの売れ行きで、数年後にKさんから増刷したいという申し入れがあった。そこで、訳文などを一部手直し、「解説」も増やして、「新訳増補」として出版（2001年）した。これも、数年で売り切れたらしい。

ローザの仕事が終わったら、イギリス資本主義の歴史的展開を記述している『資本論』第1巻第24章「資本の本源的蓄積」だけでいいから、太田君が訳してK君のところから出さない、と何回か言われた。（結局その出版には至らなかったが。）

この発言からもわかるように、藤田さんはマルクスにしても、一方では高く評価することを止めなかった。こうした評価と批判という視点は、1960年代の藤田さんのレーニン論「プロレタリア民主主義の原型」にも貫かれている。

1860年代以降、いろいろなタイプの資本主義批判が現れた。マルクスの『資本論』による資本主義批判も同時代の現象だし、マルクスも、そういう資本主義批判者たちのひとりだと考えれば、反共主義者になる必要もないし、逆に、祭り上げる必要もないのだ、と言われた。

マルクスが資本主義批判者たちのひとりに過ぎないことは、非マルクス主義者からすれば常識だろう。しかし、それが常識ではないのが、「マルクス主義者」となった（と思った）人間の「独断」というものであろう。その、いわば囚われたメンタリティから脱却するようにと、藤田さんはKさんや私に付き合ってくれたのだと思う。

Kさんから聞いた話では、96年ころ、闘病中の藤田さんから電話があり、君たちの読んだマルクスは、スターリン主義のフィルターのかかったものだ。そういうフィルターをはずしてマルクスを読み直し、週に1回勉強会をして〈現代〉を考えるための「マルクス選集」を作ったらどうか、と言われたという。君たちは知らないだろうが、エンゲルスがほとんど第1次世界大戦の予言をしているような部分がある。そんなものを含めて選んでみたら

どうか。

このときの藤田さんの意図を、藤田さんとも親しかった萩原延壽氏（1926～2001）の『自由の精神』の言葉を拝借して表現すれば、マルクス主義を「最終的な世界観」としてではなく、「社会認識の方法」のひとつとして保持すべきだと、藤田さんは考えられたのであろう。

（三）自然哲学と相互扶助論

本をどう読むか

藤田さん晩年の「全体主義論」に深く関わっているのがアーレントの『全体主義の起原』であることはいままでもない。藤田さんは、アーレントの『全体主義の起原』は、記念碑的書物だ。19世紀の『資本論』、20世紀の『全体主義の起原』と言ってよい、と言われた。

ついであるが、本の読み方についての話も印象深かった。残っている私のメモによれば、藤田さんは、

これは、という書物は一週間くらい手元に置き、枕元に置き、ひたすら読む。そして、本当に意味があるとなったら数カ月かけて読んできた。そのようにして読んだものが、マルクスであり、カントであり、山田盛太郎であり、アーレントだった。1回はじっくり通読し、何度もくり返し読む。『全体主義の起原』は、10回くらい読んだ。1回目は時間がかかるが、あとはそれほどには時間がかからない。

また、これはと思った本のばあいは、それらの書物に挙げられた参考文献・引用文献にも当たりながら読む。たとえばアーレントのばあいならコンラッドの『闇の奥』など。そして、そうした文献の質や、その読みがきちんとしているかどうかなどが、書物の価値を判断する手がかりになる。

たとえば、『全体主義の起原』第一部に出てくるセシル・ローズに関して、アーレントはミリンの本を使っている。で、ミリンの本に当たってみる。それによって、ミリンの本を踏まえているかどうかで、セシル・ローズ研究の水準がわかることになるのだ。と言われ、その具体例も挙げられた。

藤田さんは、一方では、「この言葉は、覚えておいて損はない」と、いろいろな本の「断片」を、文言とともに挙げたけれども、他方では、自分の取り組んでいる本の「論理の骨格をつかむことが大事だ。レントゲン撮るように」とも言われた。

93年2月の勉強会のテキストは『全体主義の起原』だった。3月にも勉強会は予定されていたが、藤田さんの体調不良のため、中止となり、以後、この勉強会は開かれなかった。ただ、藤田さんからKさんへはしばしば電話がかかり、Kさんからその話を聞き、また、私も回数はごく少ないながら、電話をいただいた。

自然哲学

藤田さんは、94年ころには、文字を書くこと自体が身体的に著しく困難になった。その

ころいただいた電話でうかがったことのなかに、「自分にはやり残したことが、二、三ある。そのひとつは自然哲学について書くことだ。いろいろ準備はしてきたが、ぼくにはもう書けない」という言葉があった。

ここでいう「自然哲学」がどのような内容なのか、うかがうことはできなかった。だが、ここに書いてきた勉強会では、ローマ・クラブ（著者としてはメドゥズ他）の『成長の限界』（日本語訳、1979年）をふまえた、同じくメドゥズたちによる『限界を超えて』（日本語訳は1992年）が取りあげられたから、これらの著作に扱われたようなことも、「自然哲学」には含まれるのだろう。また、藤田さんが先にふれた対談「マルクス主義のバランスシート」などでも強調したところだが、アルサーニエフの『デルスウ・ウザーラ』が描いたデルスウのような生き方も、そこに含まれるはずだったのだろう。

さらには、レイチェル・カーソン『沈黙の春』（1962年）の意義も強調されていた。読書会では、『沈黙の春』を読むということはなかったが、カーソンについては、カドリンスキーの『レイチェル・カーソン』（佑学社）を読んだ。これは、子ども向けの本である。また、J・S・コリス『光』『森』という著作も、読書会のテキストになった。

イブリン・ホン『サラワクの先住民』のことも話題になった。また、レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』についても、ブラジル先住民の居住地域がどのように「開発」されたかという点からの読みを示してくれたが、それも、藤田さんの考える「自然哲学」の一部に含まれるものであったのだと今にして思い返す。

そういえば、あるとき藤田さんから電話がかかってきて、

太田君、コーナーの『植物の起源と進化』（八坂書房、訳は1989年）を読むといい。

と言われたことを思い出す。さっそくこれを読んだが、題名からわかる通りの内容で、これが藤田さんの考える「自然哲学」とどうつながるのか、残念ながら私にはわからなかった。（読書会のテキストにもならなかった。）

藤田さんのいう「自然哲学」は、藤田さんが語った「現代日本の精神」（『世界』1990年2月号、所収。著作集6）に名前が出てくるコンラート・ローレンツや、ジュリアン・ハックスレーの所説——それは、西欧の「自己批判」でもあるというのが藤田さんの意見だった——とも密接に関わるものであったと想像される。藤田さんのいう「自然哲学」は、おそらくそういう「自己批判」を含むものであったのだろう。

それから、「やり残した」ことのうち、「自然哲学」以外のことが何だったのか、直接にうかがった記憶はなく、私から積極的に聞くことは、藤田さんの体調を考えれば、はばかられた。

『相互扶助論』など

その少しあとで、Kさんは、クロボトキンの『相互扶助論』をD社から出版（1996年）した。これは、大杉栄訳（1917年）の文字遣いを現代風に改めて出版したものだが、私自身はこの出版には関わっていない。藤田さんがKさんに「相互扶助」の重要性を説き、この本を

推薦し、出版に至ったものとのことで、わりあいによく売れたらしい。

藤田さんはKさんに、次のように言ったという。

この『相互扶助論』を総論として、各論を出すよ。医療における相互扶助、金融における相互扶助（つまり講）、老人介護における相互扶助、教育における相互扶助など。こういう相互扶助が、企業サイドに取り込まれないようなものとして存立できるかどうか、今後の社会のあり方を決める上で非常に大きな問題となるだろう。

また、発行部数は多くなくても、一定部数売れるものをコンスタントに刊行できれば、小さな出版社はやっていけるのだと藤田さんは言っていて、Kさんも『相互扶助論』の売れ行きでそれを実感したもののようである。

この『相互扶助論』も「自然哲学」的側面をもっているが、それはともかくとしよう。要は、クロポトキンの説いた「相互扶助」に、現代的意義があると藤田さんが考え、それは少数数であっても必ず売れると考えたということである。ふり返れば、1995年に起こった阪神・淡路大震災と、その後に展開された救援活動の様子などをみた藤田さんは、「相互扶助」の意義、その後に市民権を得たことばなら「ヴォランティア」であろうが、それに着目したのではなかったか。

クロポトキンの『相互扶助論』がD社から刊行されたころ、Kさんから聞いた話がある。

それは、藤田さんが「君たちには、ハンナ・アーレントを読むようにすすめたが、それはもう卒業して、今度はベルジャーエフを読むのがよい」と電話してきた、というものである。

ベルジャーエフという名前自体は「有神論的実存主義者」「宗教哲学者」として、私も学生時代から知ってはいた。また、アーレントの『全体主義の起原』には、ベルジャーエフの著作からの引用が何ヵ所もあり、アーレントもベルジャーエフを評価していることは知っていた。また、60年代の藤田さんのレーニン論にもベルジャーエフからの引用があり、藤田さんが「ベルジャーエフを引用しながらレーニン論を書くなんてことをした人はいないよ」と、誇らしげに語っていたことも記憶していた。

そこで、ベルジャーエフの著作のうち、まず彼の自伝を読んで驚いた。そこに横溢するベルジャーエフの「不羈独立」の精神、抵抗の精神が、藤田さんの精神に共通するところがあると感じられたからである。

Kさんに聞くと、「そういえば、藤田さんは、ベルジャーエフがソ連を去る話のところがよいと言っていたよ」と言ったのだが、それはこの自伝のことであろう。ロシア革命時代のロシアに生き、1922年にソ連から追放され、ベルリンを経てパリに移ったベルジャーエフ。アーレントに先んじて、ソ連やナチスを「全体主義」と名づけていたベルジャーエフ。

「戦争と関係のある一切のものを、私にはくんだ。どんな種類の暴力行使にも、私は反感をいだいた」とか、「私の全生涯を通観するとき、私は、私が誰かの権威、何かの権威を是認したことはかつて一度もなかったことに気づく」とか、「私は自由を限りなく愛するが、どんな魔法的雰囲気も自由に対立するものなのである。私はつねに人格の独立のために戦う」と、ベルジャーエフは書いた。この「魔法的雰囲気」を、藤田さんの言う「安楽全体主義」

に重ねれば、どうだろう。

藤田さんの全体主義論である『全体主義の時代経験』(1994年)は、藤田さんの考える「全体主義」とはどのようなものかを記述している。その現代的状況を打破していく方向は一義的ではないだろうが、その方向性のひとつを、ベルジャーエフのなかに見たのではないか。そんなふうに、私はベルジャーエフの自伝を読んだ。

クロポトキンにしてもベルジャーエフにしても、その著作はつとに日本に紹介されていたものであるけれども、必ずしも読まれ続けていたとはいえない。それを、藤田さんの考える〈現代〉的課題に即して再評価しようということであった。

ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』も、冷戦終結後の世界を考えれば、再読される意味がある。そのように藤田さんは考えたのであろう。

残念ながらベルジャーエフについても、私は自伝を読んだだけだった。

私の受けた影響

私は、藤田さんとの勉強会で読んだところを軸にして、『レイチェル=カーソン』(清水書院、1997年)と『ハンナ=アーレント』(同、2001年)を書いた。これらは、藤田さんに教えられたからこそ、読もう、そして書こうという気になったものであった。

そのこととは別に、藤田さんとの出会いは、その後の私に大きな方向性を与えてくれた。そのひとつは、先に少しふれた高杉一郎さんとの出会いである。高杉さんにはじめてお目にかかったのは、私が『石原吉郎評論集』を「D社編集部」編として出版した2000年であった。その本を高杉さんに贈ったことで、原宿にあった高杉宅を訪問させてもらおうと、私の経歴をたずねられた。そこで、その説明のなかで、「藤田省三先生のところで勉強しました」と話すと、高杉さんは、「藤田さんにはお世話になった」とずいぶん喜ばれた。高杉さんが、それまでなんの交流もなかった私を受け入れ、たび重なる訪問を許してくださったのは、藤田さんとの関わりが大きくモノを言ったからだと思っている。

もうひとつは、日本近現代史家の松尾尊^{たかよし}允さん(1929~2014)との出会いである。このことは、別のところ(『清水安三・郁子研究』第7号、2015年)で書いたから、ここではくり返さないが、私が藤田さんとの交流について伝えたとき、松尾さんは大いに喜ばれ、「愉快だ」と返信をくださった。

私の『清水安三と中国』(花伝社、2011年)は、松尾さんのおすすめなしにはあり得なかったものである。2008年からその逝去のときまで、松尾さんを京都に年に一度ほどだが、訪ねることを許していただいたのも、私に藤田さんとの交流があったからだという思いを強くする。

私は最近、『吉野作造』という評伝を書いた。その際、松尾さんの業績からずいぶん多くを学ばせていただいた。

話が前後するが、勉強会をしているころ、時折、私の書いた原稿や抜刷を藤田さんに読

んでいただいた。あるとき、

太田君、この原稿はだれに向かって書いているのか。
と聞かれた。やや意表を突かれた感じで口ごもっていると、

ぼくは、原稿を書くときは、丸山〔眞男〕先生に読んでもらうということを考えて書いた。

と言われた。

このことには大いに納得し、もって銘すべしと思った。しかし、このおふたりの関係を考えれば、いささかの違和感も残った。というのは、藤田さんの初期の代表作『天皇制国家の支配原理』が丸山先生に読んでもらうことを念頭に書かれたというのは百パーセント納得できるが、『精神史的考察』（1982年）以降の作品も、初期と同じ意味で丸山先生を想定していたかどうか。（丸山批判という意味合いが含まれていたと思う。）

けれども、そのことは、残るスペースでは書き切れないし、こうしてこの回想文を書いていると、別に書いた文学関係の話以外でも、藤田さんから聞いたことで書き残したこともあると、今さらながら思う。別の機会を俟つかない。